

日本のインターネット文化・社会の行方

日本技芸リサーチャー／千葉商科大学商経学部非常勤講師／

PIP総合プロデューサー **濱野 智史 氏**

中谷理事長によるプレ講義

濱野さんが到着されるまでに少し時間がありそうなので、差し出がましいのですが、きょう濱野さんがしゃべられるであろうと予想されること背景にある事情について、私見を申し上げたいと思います。

戦後、一世を風靡した丸山眞男が、引退する直前ぐらに書いた論文があるのです。終戦直後、進歩的文化人としてスタートされた丸山眞男教授も、東大紛争前後に書かれたものは成熟度が高く、納得性も高いと思います。取り上げたいのは「歴史意識の古層」という有名なペーパーですけれども、彼がそこで言っているのは、それぞれの民族の思考のかたちというものは、神話の時代、神代の初めの趣によってだいたい説明できるという仮説です。

本居宣長は、ライフワークとして「古事記伝」という44巻の大著を書いた。丸山眞男はその論評から始めて、たしかに「古事記」を子細に読めば日本人の思考のかたちは分かる、ということを行っています。たとえばユダヤ・キリスト教の、いわゆる旧約聖書に書かれている創世記は、全知全能の神様がいて、自分の意図に従って人間社会を含む天地創造を行ったわけですね。つまり、「創る」主体というものと、「創られた」われわれ・人間というものが隔絶した存在としてあるということなのです。だから、人間は神様の意図が何なのであろうかということをもんたくして、それを理想と見立てて、社会の究極目標は神様の意図通りにわれわれが動くことだ、となるわけです。これは別名「摂理史観」ともいうし、「進歩史観」とも言います。つまり、神様が求められた理想というものがあって、その理想に向かってわれわれは一生懸命何かをつくらうとする、これが西洋的な発想です。

これに対して日本が際立っている点は何かということ、日本の神話は、決して全知全能の神様がわれわれ人間世



界を含む全世界を創造したというふうになっていません。どちらかという、神様が「産む」のです。産んだものが自然につぎつぎとなりゆき変化していく。つまり、「産む」ということは、「創る」とは全然違うのですね。「産む」ということは「血がつながっている」ということなのです。継承性があるということなのです。そこには、創造主と被造物の断絶がない。「創る」ということと、「産む」ということと、もうひとつ、「創る」の対極にあるのは自然に「なりゆく」「なっていく」ということになります。何かの状態が与えられると、それに対してわれわれは反応する。自然界も反応します。人間も反応します。そして、つぎつぎとなりゆくままに世代、世代の人たちが新しい状態を生み出していく（成る）のです。

ギリシア神話を見ると、「産む」という話がないわけではない。しかし、非常に特徴的なのは、日本の場合は「なりゆく」という話が多いということですね。ある形に自然になっていく。理想とか究極の目標などはあまりないのですよ。何事も自然になりゆくわけです。

「産む」ということは、先ほど言ったように、血がつながっている、継承性があるということなのです。高天原の神々から今日までずうっとつながっている。その中で人々は、今を大事にして一生懸命頑張って新しい状況が次々と現出するということです。

丸山眞男はいろいろと議論をしているのだけれど、日本人の思考とか社会のありさまを一言であらわすと、結局、「つぎつぎになりゆくいきほひ」というふうに表現できるのですね。

たしかに、日本企業は、しばしば「戦略がない」と言われるわけです。また、日本人は理想主義的な観念論は信じない。表面上は「そうですね。それはすばらしいですね」と言うけれども、そういう観念論、抽象論というものはあまり信用していない。そして、何かが起こったときに、それに対して誠心誠意、一生懸命頑張って適応する。だから、日本人が好きなのは、どちらかといえば進歩観ではなくて進化なのです。日本の学会とか日本の社会は、ダーウィンの進化論が大好きなのです。進化論というのは適応過程なので、適応過程というのは日本人の「つぎつぎになりゆくいきほひ」そのものなのです。ですから、すごいなじみがよかったです。アメリカ等では、進化論はキリスト教との対立がすごかったわけでしょう。西洋は進歩史観なので、神様が創った通りにいくのだから、という摂理を前提として考える社会なのですね。

きょう濱野さんがお話しされるであろうAKBあるいは地下アイドルの世界がどうしてこういうふうになり立ってきたかということについては、濱野さんは、この言葉では言わないと思うけれども、濱野さんは「生態系」という言葉を使っていますね。生態的に自然適応をお互いにしながら、どんどん変形していく。彼が言うアーキテクチャというものは何か理想主義で固まったものではなくて、そこに身を置かれた日本人、若者ひとりひとりがそれに適応しつつ、しかし、日本人の価値観をその中にインプットしながらどんどん新しいかたちが「成っていく」。こういう姿を濱野さんはイメージしているのではないかと。丸山眞男を読んでおられるかどうかは分かりませんが、こういうことを前提に濱野さんのお話を聞くと、「ああ、あのことだな」ということが出てくるのではなからうかというのが私の予測です。その予測を前提に彼の話を楽しみにして聞いてみてください。それで、もしこれが当たってれば、「それは分かっているよ」というコ

メントを彼にしていいただければと思います。

なお、「歴史意識の古層」という論文は『至誠と反逆』（ちくま学芸文庫）という文庫本の中の一章で出ております。僕もこれを読んでみたけど、すごい教養がないと読みきれない。出てくる文献、引用されているものが全部古典で、「こんなものあったっけ」というものがいっぱいあります。とてもついていけなかったのですが、要約だけはできましたので、以上ご紹介まで。

濱野講師の紹介

【太下】 本日の講師の濱野さんについて、ご紹介させていただきます。

ご存じの方が多いと思いますけど、濱野さんは『アーキテクチャの生態系』という本を2008年に出して、第25回テレコム社会科学賞を受賞する等、かなり話題になりました。

この本を読んでいただくと分かるのですが、2008年当時、日本でいろいろなネット環境の変化が起きました。正確にいうと、それ以前から起こっていたことなのですが、その変化が非常に顕著になってきた時代だったと思います。たとえば2ちゃんねるが社会的にも、いわゆる夜の世界から昼の世界に見えてきたような時期でもありましたし、初音ミクも普及し始めた時期です。その他、セカンドライフが話題になった時期でもありました。

そういう状況を踏まえ、濱野さんは、日本のインターネット文化の特徴についてこの本の中で語っているわけですね。いろいろなウェブサービスがあるわけですが、その中から日本的な特徴を導き出しています。語りかけ調で書いているせいもありますけれども、非常に分かりやすく、2014年から当時を振り返るという意味でも、非常におもしろい書物ではないかと思います。

きょうはこのようなインターネットの話も出ると思いますが、事前に打ち合わせをした時点では、濱野さんから「ぜひアイドルの話をしたい」と言われております。「何でアイドルなんだ」と思われる方もいるかもしれませ

ん。実は濱野さんは、『アーキテクチャの生態系』を執筆した後、インターネット系の評論等はもちろんいろいろと執筆されているのですけれども、その一方で、アイドル系の本も出されています。一番有名なのが『前田敦子はキリストを超えた 宗教としてのAKB48』という本ですね。そして、単に本を執筆するだけではあきならず、ご自身でアイドルをプロデュースするということも始めています。本当はきょうの講義も自らがプロデュースするアイドルを連れてくると言っておられたのですが、直前になって、やめたという連絡が来て、私はちょっとがっかりしました。ちなみに、ご自身がプロデュースされたアイドルがデビューするのが、6月15日だそうです。というわけで、きょうの講義はかなりの部分がアイドル論になると思います。ただ、アイドル論といっても、社会評論としてのアイドル論ということではなくて、日本のアイドルという存在の状況を見ると、日本社会の構造が透けて見えるというロジックでお話をされると思います。

一方で、アイドルという現象を見れば日本の社会の構造が透けて見えるということ自体はその通りかもしれないのですが、それはある瞬間の話でしかないですよね。先ほどの理事長の話にもありましたが、もっと深く遡るというアプローチもあるでしょうし、逆に、その理論が本当に確かなものであれば、これからどうなんだと未来に伸ばしていくこともできるわけですね。

濱野さんは、この本の中では、先手を打っていて、「ウェブの未来予測はできない」と書いています。ただし、アイドル論というものは先読みをしなければいけない部分がありますので、「この次はどうなるんですかと」という点については、濱野さんに素直に聞いてみたいところだと思っています。

アイドル論が中心になるとはいえ、濱野さんのもとの専門分野が情報社会学ということもあり、インターネット系の話はそれなりに出てくると思いますので、その分野の話についてもいろいろとお聞きしてみたいと思います。特にインターネットの進展がわれわれの社会や経済、政治環境にどういう影響をもたらすのか、民主主

義そのものが変わっていくのか、といった点についても質問してみたいと思っています。

ちなみに、濱野さんは「初音ミク」について、初音ミクをサポートするニコ動とかPixivができたからはやったのだと説明しており、それら全体を新しいアーキテクチャとして取り上げています。ただし、個人的な意見ですが、同様のアーキテクチャは、もっと以前から日本にあったのではないかと考えています。たとえば、和歌における本歌取りであったり、連歌における座みみたいな仕組みであったり、さらに言うと、近代における俳句の季語というものもそうだろうと思います。

俳句というものは、あらかじめ定められた季語を使っていると思うかもしれませんが、そんなことは全然なくて、季語というものは、当然ですけれども、時代によって変わっていくわけです。だから、俳句歳時記はどんどん新しくなっていくわけです。季語は新しくできていくわけですね。では、いったい季語は誰がオーソライズしているのかということ、誰もオーソライズはしていないのです。どこかの誰かが「今の季節感を表現するにはこの言葉がいい」と思って、ある単語を織り込んだ俳句を読むと想定してみましょ。もちろん、それだけでは世の中は動かないわけですが、そのうちのひとつの俳句がとても素晴らしい作品であった場合、他の誰かが「確かに、この単語は、今の季節感をあらわす言葉だ」と考えることもあるでしょう。そして、その単語をパクることになります。こうして、ひとつの単語をバクリあっていくことによって、結果としてある単語が「季語」になるのです。もともと日本の文化的作法に、そういう仕組みがあったのではないかと考えているわけです。本日はそのところも質問してみたいと思っています。

さて、いよいよ濱野さんが登場いたしましたので、前座でこんなに長引かせる必要がなくなりました。では濱野さん、さっそくですが、講義をお願いいたします。

Part 1 : 講義

はじめに：インターネットはどうして始まったのか

最近、本当に何をやっている人間なのか、よく分からなくなってきました。もともとはSFCで情報社会論を学びました。私の修士論文は、日本とアメリカにおいて、ブログというものがどういうふうに進透するのか、社会に普及する過程で変わるのか、ということの研究して比較しました。ジャンルの比較社会的な研究をやったのです。評論家としてのデビューは情報社会論で、『アーキテクチャの生態系』という本を執筆しました。特に日本のインターネット社会論をやりたいということが、私の研究者の出発としてのモチベーションとしてありました。

どういふことかといいますと、インターネットが社会を変える仕組みを形成する、といういわゆる情報社会論というものは、基本的にすべてアメリカへのあこがれといいますか、文化批評的にいうと、アメリカの影を非常に帯びたものとなっています。そして、基本的にはアメリカのような個人の自由、表現の自由が最高という人たちがつくったテクノロジーでして、実は日本にはあまりマッチしない属性を持ったものなのです。

私は今年の4月から大学の講義を担当して、18歳とか19歳の学生を前にインターネット社会論という授業をしています。最近の大学1年生は1995年とか1996年生まれだったりするので、物心ついたときから普通にブロードバンドのインターネットやYouTubeがあるという世代です。そして、最初から携帯で画像や動画が送れるという世代なので、「どうしてインターネットというものを使っているのか」という背景はまったく知らないのです。

ただ、本日ここにいらっしゃる皆さんは、さすがにその辺は知っているぞみたいな感じですね。電話とかマスメディアと違って、基本的にはインターネットというものは、アメリカのハッカーたちが個人の自由をエンパ

ワメントするということを前提につくったということをご存じの方は多いと思います。例を挙げますと、昔、コンピュータというものは、最初はパンチカードを使って、後に文字ベースでメールを打って、機械語で命令を送っていたのです。これに対して、コンピュータを誰でもが使えるようにするために、GUI(グラフィック・ユーザー・インターフェイス)が開発されました。現在私たちがパソコンやスマートフォンで普通に使っているものです。それはアラン・ケイというエンジニアがパロアルト研究所でつくったものなのです。そして、そのもともとの原理はマクルーハンの「グーテンベルクの銀河系」や「メディア論」にあり、アラン・ケイは「メディアは身体の拡張だから、誰でも使えなければいけない、そういうメタメディアこそが人間の自由を倍加する」というメッセージを読んで、「おれもコンピュータをそうしよう」と思って、つくりあげたものです。さらにアラン・ケイがつくり、さらにそれをパクってスティーブ・ジョブズがMacをつくるという過程がありました。このように、インターネットはいかに人間の自由をエンパワメントするかということを前提につくられているのです。そこで、インターネットを通じて社会が変わるという議論も、基本的に個人は自由であり、人間の情報処理能力や情報通信能力を高めるとどんどんいいことになるに決まっている、という前提ですべて考えられているのです。

それに対して、日本の18とか19歳の大学生に、「おまえら、インターネットというのはアメリカのハッカーたちが個人の自由というのはいかに大事かと思ってつくったんだよ」とか言っても、みんなポワーンとして、何のことだか分からないみたいな顔されるのです。

これは私が必ず話すエピソードなのですが、2004年頃の朝日新聞だったと思いますけれども、若手の記者が会社に断りなく勝手にブログを始めたそうです。そうしたら、どうなったかという、会社で大問題になり、その社員は謹慎処分か休職処分になったそうです。ブログやっただけで処分とは、衝撃的ですよね。ちなみに朝日新聞は1、2年前から、各記者にツイッターをや

れ、ツイッターをやれとあって、個人もツイッターをやる時代だと言っているのです。でも、2003年ぐらいですと、朝日新聞の記者が勝手に社の方針と異なるようなブログを書き込むようなことはまかりならんということで、「おまえ、なんで社の方針と違うことを勝手につぶやいているのだ」という状況が普通にあったのですね。

ちなみに、日本で普通にブログをやる方は、一般的に所属の組織名を出さないはずなのです。なぜかという、何かを発言しても所属組織の意見だと思われるからです。たとえば、ここ数年の日本社会において、某電力会社の社員が「脱原発」とブログで主張したら大問題になるわけですね。

つまり、日本は個人が自由に表現するということができない社会であるようです。丸山眞男の言葉でいえば、「無責任体制」でしょうか。山本七平も言っていますが、日本人は何でか知らないけど、個々人が「本当はここは違うのにな」と思っている空気も流されてしまうのです。日本の社会は、個々人の自由というよりも集団の空気の論理が左右して、自由に物が言えないみたいなところがあるようです。

私の研究のモチベーション

私の研究では、そういう日本社会では、2ちゃんねるですとか、そのころですとニコニコ動画ですとか、個々人の発言者のオーサーシップが明らかにならない、匿名のインターネットサービスが異常に発達したのです。こうしたことが、『アーキテクチャの生態系』という本を書くモチベーションでした。

私の場合は2003年ぐらいにブログに触れて研究を始めたのですが、最初の動機は今お話ししたような「何で日本では2ちゃんねるがはやったのだろう」という疑問でした。そして、比較社会学的な条件があったうえで、社会構築的にその技術がなじんだという背景があるのかもしれない、という仮説のもとで『アーキテクチャの生態系』を書いたのです。実は当時から、特に海外から来た人に、「何で日本では匿名の掲示板がはやるのだ」「個々



人がオーサーシップをもって発言する方がシンプルでいいじゃないか」と言われていました。こういう時に、2ちゃんねるがはやる理由を説明するロジックとして、日本社会論で非常にオーソドックスな個人主義が集団主義かということを中心にベースに読み解くという説明をしており、そことが私のもともとの研究のモチベーションとしてありました。

ただし、このモチベーションはあまり理解されなかったのです。というのは、インターネットが好きなのはアメリカ大好きな人間ばかりでして、そこに無自覚な人間が意外と多いのですよ。「アメリカでもこうなのだから、普通日本もそうなるでしょう」みたいなロジックで語る単純なタイプがほとんどなのです。こういう考え方を社会学で「技術決定論、テクノロジカル・ディターミニズム」と呼びます。つまり、アメリカでインターネットという技術が生まれた、その技術を日本に導入すると、日本もアメリカ式な個人社会になる、みたいな考え方です。

また、ここ10年ぐらいに日本ではやった情報社会論としては、梅田望夫さんの『ウェブ進化論』という本があります。梅田さんはウェブ2.0の状況を日本語で読み解く本を書いたわけですから、そして、ブログが出てきたことで、誰もがブログで自由に発言するような「総表現社会」になると言っていました。

今はMITのメディアラボの所長になられたジョー・イトウ（伊藤穰一）さんも、ブログが普及した当時、エバンジェリスト的な働きをされていました。そして、日本で

は2ちゃんねるばかりはやっていて、それはそれでいいのだけれど、個人が自由に発言する社会じゃないとよくないから、みんなムーバブルタイプの日本語版をインストールすれば、そういう社会へ変わるのではないかと伊藤さんは言っていました。

私はそれを見て「へえー、そういうことがあるんだ」と思ってブログを始めたという経緯があるのです。けれども、たかがブログツール一個では日本社会は変わらなかったわけですね。

その後1年ぐらいしてココログというニフティのブログサービスが始まって、そこで眞鍋かをりさんというインテリ女性タレントが眼鏡かけた写メをアップしたところ、それが日本で最初にトラックバックをたくさん集めたというエピソードとなっています。

当時、伊藤穰一さんや梅田望夫さんは、個々人がみんなに向かって自由にオピニオンを述べる場所としてのブログの側面を重視していたと思います。アメリカでは、ハーバースが言うところの「公共圏」を実現するツールとしてのブログ、というイメージが流布したのです。それに対して、日本では眞鍋かをりとか芸能人が眼鏡をかけると、みんなが「いいね、それ」とか言っちゃうのです。

結局、日本では、個人をエンパワーメントする情報技術が導入された時に、それを活用できるほどまともに活動している人間は芸能人ぐらいしかいなかった、ということなのです。もしくは、すごく皮肉なことなのですが、日本でつい最近まで一番アクセス数が多かったブログは、「痛いニュース」のような、2ちゃんねるのまとめサイトだったのです。つまり、もともとは個々人が自由に発言するためにつくったブログが、なぜか日本では2ちゃんねるという匿名サイトでみんながしゃべっている議論のうちおもしろいところを抽出して張りつけて広告収入を稼ぐものになっているという、大変な皮肉な現象が生じているのです。インターネットとは、個人をエンパワーメントするはずのものなのに、日本では匿名的なものがわらわらと生成し、のさばってきたのです。

このように、何で日本では匿名的な文化の方が強く

なってしまうんだろう、という疑問が私のもともとのモチベーションなのです。少なくともアメリカ人が考えているように、インターネットで個人の自由がエンパワーメントされて、それでオーケーみたいな社会観というか人間観が成立しないのはなんでなのだろう、というのが私のモチベーションとしてありました。もっとも、2000年代中盤ぐらいまでは、2ちゃんねるという匿名掲示板は、まともな研究の対象にすること自体がNGみたいな雰囲気がありました。それがいいとか悪いみたいな価値判断するのは非常に簡単なことなので、きょうはその話は捨象しておきますが。

「ブログ+グーグル」のアーキテクチャ

もっとも、『アーキテクチャの生態系』の中では、そういうモチベーション自体についてはあまり書いていないのです。この本はインターネットサービスが織りなす「生態系」のビジュアライズ、というつもりで書きました。とにかくこの進化の早いネット社会の生態系を俯瞰して描きたいと思ったのです。

たとえばその本で書いたのは、グーグルはワールドワイドウェブのハイパーリンク性に着目し、ハイパーリンクがたくさん張られているサイトはいい情報だろうと判断した、というようなことでした。もう少し詳しくいうと、ブログというものは、ほとんどパーマリンクという記事単位でURLを生成しており、個別の記事から別の記事への情報の流度が高まっているのです。イメージ的に言うと、引き出しの中にたくさんの仕切りがあって、ここは「〇〇ゾーン」、ここは「××ゾーン」みたいな感じで、あらかじめ整理がしやすくなっているのです。

このことが理由で、ブログはグーグルに引っかかりやすくなり、それによって、ブログの認知度が高まっていったのです。私は2002年か2003年頃からブログをやっていたのですが、ブログで記事を書くだけで、普通の個人サイトよりはるかにグーグルのページランクが上位にいくのです。私個人の実体験として、そのとき私は単なる学部生でしたけれども、何かの事件があってそれに

ついて論評すると、次の日にグーグル検索すると1位になるみたいな現象が起きました。そして、会う人・会う人に「濱野君のブログ、きのうグーグルで見たよ」みたいなことを言われるのです。つまりこのとき、グーグル＋ブログが組み合わさることで、情報収集を効率化するアーキテクチャが生み出されていたということです。

これに対して日本の2ちゃんねるは、ブログとは全然別で、検索を一切前提にしていないのです。というか、そもそもどのスレッドゾーンも1,000個埋まってしまうと消えてしまうのです。過去ログについては、お金を払って見れば見られますけれど。また、スレッドフロート式といって、新たに書き込まれたおもしろい情報が上の方に来て、まさに「つぎつぎとなりゆくいきほひ」となっており、常に何かしらみんなが注目し、書き込みをしているものが上の方に来る仕組みになっているのです。先ほど言った通り、1,000個いったら消えるので、ひたすらおもしろいものが常にコピペで生き残っていくのです。コピペされなかったものは単に消えていくのです。なぜコピペされるかといったら、個々人の書き手は匿名ですので、著作権を主張しようもないからです。また、「おまえ、おれが書いたそれをパクるな」という理由もないわけです。だからこそ、おもしろいと思ったらコピペされて、どんどん上の方で掲示されることになります。

個々人の発言のオーサーシップが残っているタイプの情報処理のメカニズムではなく、集団主義的にというか、誰が何を発言したというオーサーシップは決まっていないのだけれども、何となくこれはおもしろくねえ、みたいな空気が生き残りやすい。こうした2ちゃんねるのようなアーキテクチャを対象として、社会学的な視点と情報環境と結びつけて分析するという試みは、当時はなかったのではないかと自負しています。

しいていえば、グループウェアの研究や、コンピュータ・メディアエーティッド・コミュニケーションの研究の人たちは、どういうふう設計するとみんなの意見が出やすくなるみたいな感じで、意外と近いようなことを研究しているのかもしれませんが、社会論にまで広がる視

野で研究しているというケースはなかったのではないのでしょうか。長々とお話してきましたが、私が『アーキテクチャの生態系』を執筆したモチベーションとして、こういう背景がありました。

韓国の「犬糞女(ケトンニョ)事件」

ちなみに、日韓中台湾はそれぞれ2ちゃんねる的な巨大なサイトがあります。dcinsideは韓国のサイトで、2005年頃、私が国際大学GLOCOMの奨学生のとときに、実際に韓国に出張旅行で行って調べた事例です。

2003年ぐらいに2ちゃんねるに対してサイバーアタックというか、F5ボタンを連打して、たくさんのアクセス負荷をかけてつぶそうとした事件がありました。これをしかけていたのが韓国の掲示板サイト群だったので、これらは2ちゃんねるにまったくそっくりなのです。

ちなみに、こうしたサイバー戦争についてはひとつ笑話があります。当時、2ちゃんねるに対してどこかがサイバー戦争を仕掛けてきたのですけれども、実際には、その一日で一番アクセス数が多かったのは、ハロープロジェクトのモーニング娘。のスレッドを語っている狼板だったのです。つまり、連続攻撃をされているサイトよりも、普通の日本のしょうもないアイドルおたくが見ているサイトの方がアクセスが多い、という逸話です。

さて、私が韓国へ行っているいろいろ話を聞いた中で、すごくおもしろかったのは「犬糞女(ケトンニョ)事件」です。韓国の匿名掲示板が起こした、今でいうネット上の炎上事件の走りです。私の記憶では2005年頃に、アメリカの新聞の1面か2面でも取り上げられました。

これはどういう事件かというと、韓国の地下鉄で女性が乗っていて、犬を連れていたのですが、この犬がふんをブルツとして、しかもまったく処理せず、そのまま電車をおりたという事件です。そして、その一部始終の動画か写真を誰かが撮っていて、ネットでさらされたのです。日本で同じことがあったら、すごいことになりそうだなと思う方もいるでしょうが、韓国でもたいへんなこ

となりました。dcinsideという匿名掲示板の住人が、「何だ、こいつ。こいつの個人情報をさらそうぜ」といって、当時、韓国のSNSのサイワールドというサービス、日本でいうミクシイに掲載されている個人情報をみんなが勝手に探して、「こいつだよ」みたいな特定が始まって、ネット上で魔女狩りのようなことが行われたのです。

このとき、ネットにおいて魔女狩りの危険性があるとはおそろしいということがアメリカの新聞で書かれていました。私としては逆に、アメリカ人はネットが魔女狩りの場になるかもしれないということをこの時点で始めて知ったのか、と衝撃を受けました。2004年のことだったので、日本では同じような炎上事件が起こりまくっていて、「はっ、今さら気づいたの？」みたいな感じでした。また、「どれだけアメリカは民度が高いのだろう」とも思ったのです。その後、似たようなことがアメリカでも起きまくったので、これはすごく印象に残っている事件です。これを見て、dcinsideは日本の2ちゃんねるみたいだという印象を受けました。

さらに、この話には落ちがあるのです。この事件の1年後ぐらいに韓国に行って、現地のネット評論家と会いますか、ITに詳しいし、社会批評もやられているという方にインタビューさせていただき、この事件について聞いたのです。日本人の感覚で普通に考えたら、この事件ではdcinsideが悪者じゃないですか。日本だったら、2ちゃんねるがよろしくないということになるでしょう。匿名だから人の誹謗中傷、個人情報の流出、さらし上げがどんどん起こってしまうのだと。去年の事件でいいますと、たとえばバイトテロといって、学生がアイスケースの中で「イエー」とか言っている写真を掲示したりしています。そのまま放置すれば、ただの若者の悪ふざけなのですけれど、2ちゃんねるがパツと拾い上げて、「こいつ、こんなことをやっているぞ」みたいな感じで拡散していくのです。あれはどう考えてもツイッターを使って悪ふざけしている若者が悪いのです。また、今まではおとがめなしでやっていたようなことを、2ちゃんねるが無理やり拾っているのだから、2ちゃんねるも悪い感じ



がしますね。

ところが、ケトンニョ事件のときに誰が一番怒られたかということ、韓国のNaverという企業なのです。Naverとは、日本で有名なLINEをつくった会社の、韓国の親会社です。Naverの日本支社がLINEをつくっているのです。もっと簡単にいえば、韓国のヤフーみたいな存在でしょうか。2005年当時、韓国でグーグルはまったく使われてない状況で、なぜかということ、Naverがあまりにも強過ぎて、Naverの下にブログとか検索情報とか全部統合されているみたいな状況だったからです。

ちなみに、韓国は日本よりもブロードバンド化が異常に早く、2001年ぐらいには人口の50%から60%がブロードバンドを利用できる環境になったのです。そのようになった理由は簡単で、ソウルにほとんどの人口が集中している都市集中型の国家で、さらにほとんどがマンションに暮らしているのです。だから、あっという間にブロードバンドが達成できたということです。そうすると、韓国ではインターネットが普及する初っぱなから、画像とか動画がバンバン使われたらしいのです。これは日本人にはあまりない感覚ですね。

動画は、当たり前ですがテキスト検索はできないで、動画の中身を検索できるわけではないのです。つまりグーグルみたいなロボット検索は意味がないのです。そういう状況において、たとえばAKBの何々さんが映っている動画を見たい、と思った時に、それに答えてくれるサービスがあると嬉しいですよ。そこで、テキスト

では処理できない検索をしたいという人向けに、何か質問すると、人間が見て「それはここにありますよ」みたいに答えてくれるというサービス、すなわちQ&Aの仕組みのNaverが韓国ではやったのです。Naverの検索結果では、Naver Q&A 検索の結果、Naver 画像、Naver ブログ、Naver 何たら、と続いて、最後にインターネットの検索結果が出るのです。つい半年ぐらい前に検索したらそうだったから、今もそうだと思いますけれども。インターネットの検索結果が最後だというのは、衝撃ですよ。それぐらい韓国はNaverに全部乗っ取られているというか、インターネットに支配されているのです。

何が言いたいかというと、ケトンニョ事件で一番批判されたのはdcinsideでなくて、Naverだということです。そんなくだらない事件をNaverニュースのヘッドラインに載せたNaverが悪いのだということです。これは結構おもしろい現象だと思いませんか。たとえば、日本でいうと2ちゃんねるで祭り上げられたバイトテロ事件について、ヤフーニュースのトップラインに挙げたヤフーニュースの見識が問われるみたいな感じですか。分かりますかね、この感じ。日本では、そこまでヤフーニュースが議題設定機能をもっているわけではないですよ。逆にいうと、韓国ではみんながNaverしか見ていないから、Naverの見識が問われたということなのです。どれだけ韓国でNaverが強かったのだということを示す事件なのですね。どちらが正しいというわけではなくて、同じインターネットを使っているのに、これだけ社会ごとにメディアの立ち位置や役割や振る舞い方が違うのか、ということなのです。

dcinsideと2ちゃんねるの同質性

ちなみにdcinsideとは、デジタル・カメラ・インサイトの略で、もともとデジタルカメラの画像をチェックするために画像をアップロードする機能がついているという掲示板だったのです。

ちなみに、ソウル大学へ行くと、若い人が7、8人いたら、そのうち1人は妙に日本語ができるやつがいますの

で、通訳は要りません。そこで、「日本に来たことあるの」と聞くと、「ないです」と答えるので、「どこで日本語を覚えたの」と尋ねると、「アニメで覚えました」と答えるのです。そんな彼らに「dcinside、ってどうなの」と聞いたら、みんな「濱野さん、dcinsideについて聞いてちゃだめです」みたいな答えなのです。分かりますよね。皆さんだって、アメリカ人が来て、「2ちゃんねるについて教えてください」って言われたら、みなさん「2ちゃんねるなんて、研究しなくていいよ。もっとまともなことを研究してよ」と答えますよね。それと同じです。

このとき、dcinside発のおもしろい遊びを紹介してくれたのですが、それが「1、2、3遊び」です。日本でいうところのさいとう・たかを氏とか、「こち亀」の作者の秋本治氏みたいな感じのマンガ家さんが韓国にいて、年間300冊とか200冊の漫画を出している大衆作家らしいのです。

そのマンガ家さんに、宇宙戦艦ヤマトの丸パクリみたいな漫画があって、そのマンガで毎回、絶対に出てくるコマがあるのです。それは、右側のページで戦艦の提督みたいな人が「よし、何々号出撃」というらしいのですが、そうすると、左側のページで構成員の部下が必ず「1、2、3、出撃」と、船、行きますみたいな感じのコマが、見開きで毎回、毎回、出るらしいのです。これで原稿料をもらえるの、みたいな感じですよ。

これが韓国のおたくの中ではお決まりの「はい、はい。あれね」みたいな感じで分かるらしいのです。たとえばNaverの、日本でいうヤフーニュースのヤフトピックスの掲示板とかに、全然普通に議論している時に、誰かが「何々、仕切り」と書いて書くと、その後、「1、2、3、出撃」って、続々らしいのです。これが成功すると、やったーということですが、それだけの掲示です。

ソウル大学の学生が「これがはやっています」と教えてくれたのですが、「そんなこと教えて、どうするの」みたいな感じで学生たちはめっちゃシニカルに笑っていたのが今も印象に残っています。それくらい、韓国の匿名サイトも、本当にびっくりするぐらい2ちゃんねるっぽい

というか、無意味なのです。でも、形式というか、フォーマットだけはあるわけです。そして、そのことを分かっているやつだけが投稿して楽しむというゲームなのです。この遊びについて聞かされた時、2ちゃんねるは日本だけの特別事例というわけでもないんだな、ということを確認させられました。

アメリカのオタクがつくった「4ちゃんねる」

ちなみに、『アーキテクチャの生態系』という本には書いていないのですが、アメリカに「4ちゃんねる」という2ちゃんねる的匿名サイトがあります。一言で言ってしまうと、アメリカのアニメおたくの少年が、「おれもアニメの情報とか知りてえわ」と思って、日本の「ふたばちゃんねる」という、2ちゃんねるの画像掲示板に近いものを勝手に始めたというようなサイトです。

今の話の流れでいうと、普通、欧米圏では匿名制は基本的にないのです。匿名サイトは確かに日本から出てきやすいものだというのが私の分析だったのですが、その後、日本以外でも意外と出てきているのです。

さて、4ちゃんねるは、2003年から運営されているアメリカの匿名画像掲示板です。クリストファー・プール氏（通称ムート）というアニメおたくの方が15歳のときにつくりました。2003年はまだYouTubeがないので、動画ではなく画像でもいいから日本のアニメの情報を知りたいということで立ち上げたサイトです。今では、アニメ好き、アメリカという Geek です、Geek だったら知っているサイトのうち、20本の指ぐらいには入る大きいサイトとなっています。ちなみに日本には、さっき申し上げた「ふたばちゃんねる」という匿名画像掲示板が2008年に登場しました。匿名で、かつ情報がどんどん消えていくという、2ちゃんねると同じタイプのサイトです。

さて、2011年か2012年頃に、ムートさんが日本へ来たときに、彼と直接会っていろいろ話を聞きました。ムートさんは、コロンビア大学の文化人類学の学生で、大変インテリクチュアルというか、クレーバーな方でし

た。そして、ムートさんは結構イケメンなんです。なんでこいつがアニオタだったのだろうと、会った瞬間、思ったのですが。

それはさておき、4ちゃんねるには、本当に2ちゃんねると同じネタ的な感覚の遊びがいっぱいあります。たとえば、4ちゃんねるでつくられたネタ画像として、ネット空間の生態系を人間の身体で表現したというものがあります。人間の上の方から、TEDとかニューヨークタイムズ、AP通信、ロイター、があげられています。そして、redditとかソーシャルブックマークがきて、ウィキリークス、YouTube、が続いています。ちょっと質が下がるというか、下品なものも入っていますね。その後、diggとポイントがあって、最後に肛門に近いところに4ちゃんねるという感じになっています。

また、ネットサービスのユーザー層を勝手に漫画化してみましたみたいなものもあります。たとえば、ツイッターはプログラムが好きそうな感じ。フェイスブックはリア充で、大学のトレーナーとか着ちゃうんです。レイジットやdiggはサブカル好き、マイスペースは音楽好きみたいな感じ。今では違うと思いますけど。

この4ちゃんねるについて、私が初めてちゃんと認識したのは、Nice boat. 事件です。このNice boat. 事件、ニコニコ動画が好きな人はもしかしたら知っているかもしれないですね。日本で『School Days』というアニメがあって、最終回がすごく残虐的なシーンだったのです。当時たまたま、ある殺傷事件が起きて、同じ武器を使っているから不謹慎と言われかねないということで、最終回は1週間、放送をお休みしたのです。そのとき、「都合により番組は変更して送ります」と放送された内容が、船がふわっと浮かんでいる、資料映像みたいなものだったのです。

当時ニコニコ動画はアニメのアップロードを許していたので、これがアップロードされて、「おれたち、スクールデイズの最終回を見たかったのにな。ふざけんな」みたいな感じで、みんなぶち切れていたのです。これに対して、4ちゃんねるでは、これをスクールデイズ最終回と

いうスレッドでアップして、さらにNice boat.と投稿したやつがいたのですね。「えっ、そこ？ 関係なくねえ？」みたいな感じですよ。

これが2ちゃんねるで拾われて、「すげえおもしろいことを言っている」となったのです。そして、日本でもそのときだけでしたけど、Nice boat.が注目されて、みんなでこの動画をアップして、みんながNice boat.と言いまくるみたいな、そういう遊びがニコニコ動画サイトでもすごいブームになったのです。そういう事件です。

ところで、インターネットについて皆さんがどう思われているのか分からないのですが、実際にはマクルーハンが言うところのグローバルビレッジ(世界村)ができていないわけではないのです。結局、言語の壁が高過ぎて、インターネットは国境の壁を越えていないと思うのですね。特に日本のインターネットは、日本語の情報で充実しまくっていて、ほとんどの人は英語圏のことなんてまったくいまだに気にしないまま生きているのです。

なのですが、Nice boat.みたいな匿名の無意味なシュールさは国境の壁をあっさり越えてしまうのです。ちなみにクリストファー・ムートさんに、アメリカにおける匿名文化圏ってどうなの、ということ質問したことがあります。そうしたら、「アメリカでもフェイスブックは、みんな好きじゃないですよ」みたいな回答でした。みんながみんな実名でガンガン日常的なことを会話して、リア充な感じの話をするのは、そういうことが好きなやつもいるけど、そういうことを「おたくは特に嫌なんだ」と、はっきり言っていました。

別に日本でははやってないですけど、Diasporaというフェイスブックまんなのだけれども、フェイスブックで運営されているのではなくて、勝手にサーバー上でフェイスブック風サービスを立てられるというオープンソースのSNSがあります。そういうサービスが盛り上がっている理由は、みんながみんなフェイスブックで相互監視して、何かアップしたら誰かが必ず「いいね!」と押し上げるみたいなことを好きなわけではなく、面倒くさい、うざったいと思っている人が結構いるわけです。

まさにFacebookから「脱出 Diaspora」したいわけですね。だから、アメリカもみんながみんな実名主義なわけでもないのです。確かに統計でも、「アメリカで若い人たちは最近、フェイスブックをそんなに使っていない」というデータも出ているので、みんながみんな実名で、個人情報さらしまくってもオーケーみたいな、そんな感じでもないという感じが、おたくのムートさんに言わせると、アメリカにもあるそうです。

間違いからも生まれる創造性

「つぎつぎとなりゆくいきほひ」ということについて、丸山眞男は「日本の歴史の古層」で、日本社会に埋め込まれたものだとしています。ただし、丸山眞男はこの言葉をあまりいい文脈では使っていないのですね。「そんなことをやっているから、日本人はいつまでたっても無責任の体系に支配され、軍国主義の台頭とかを許してしまい、市民革命をなし得ない、だめな国である」という感覚なのです。

一方で、匿名文化圏に関して言うと、基本的には匿名性こそが「ミーム」ですね。たとえば、ちょっとしたアイデアとか発想を否定せずに、どんどん拾い上げるって大事じゃないですか。

その際に、みんなが匿名だと、ミスってもいいし、どんな変なことでもいいし、言いやすくなるわけです。エラーも多いんだけど、エラーが多いからこそ、実はおもしろいアイデアが生まれるみたいなメカニズムがあるのではないかと思います。そして、ちょっとポロツと言ったことが、おもしろいから「それ採用」みたいな感じで、みんながコピペして広めていくみたいな感じで、本当ががちゃがちゃと常に試行錯誤して行くわけです。これは、生命の遺伝のプロセスに近いといいますが、突然変異でたまたま環境に適応したから、そいつが生き残っちゃうみたいなことがあるわけです。

ムートさんはそこまで詳しくしゃべってはいなかったのですが、同じようなことをしゃべっていました。私はこのとき、『アーキテクチャの生態系』を書き終わって

いたのですが、まったく同じことを考えている人がアメリカにもいるんだということに、私は新鮮な驚きを感じました。

先ほどは、日本社会は集団主義であり、個人の自由はあまりない、だから匿名サイトであるという説明をしました。こうした点については、どちらかという、普通の社会評論もしくは文化評論、社会批評、社会学、そして哲学・思想の文脈では、日本のよろしくない点として長らく認識されたものだと思います。けれども、匿名性の方が創造性は生まれやすいのだということは、ちょっとおもしろい論点になるのだと思います。

たとえば、私は起源知りませんが、すごい昔のネット言葉で「wktk」というものがあった、これは「わくわくでかてかしている」という意味なのです。私の想像では、誰かが「わくわくでかてかしている」と打つのが面倒くさくて、たまたまAが抜けちゃって、急ぎ過ぎてこう打ったものなのだと思います。そうしたら、みんなが、これは「わくてか」ということだなと分かって、この言葉が定着しちゃった、みたいな感じですよ。

最近でいうと、2ちゃんねるって、誤字ベースのタイポ (typo) の宝庫ですよ。タイポベースの創造性というか、流行語がいっぱいあります。たとえば、2〜3年前に、サッカーの本田選手がPKを決めたときに、「本田△ (本田三角形→本田さんカッキー)」という流行語が生まれました。私は、これを2ちゃんねるで初めて見たとき、「何だ、この△は」と思いました。でも、本田選手が格好いいという文脈とそろってれば、「本田△」、「ああ、はい、はい」みたいに理解できるわけです。「本田さん、カッキー」と打った人が変換したら、これが出てきちゃって、そのまま投稿したのでしょう。普通なら「さん、かっけー」と打ちかえなければいけないんだけど、あまりにも夢中で、修正する暇がなく打っちゃったのだと思います。でも意味は分かるじゃないですか。そして、「そうか。これからこういうふうにしよう」といって、この表現が定着して生き残っていくみたいな流れが生じたのです。ミスが生む表現の構造は、2ちゃんねるに似ています。ある種、

突然変異型の創造性、いわゆる作家型の創造性とは違って試行錯誤から生まれる、グッと残るミームみたいなものは、匿名サイトの方が生き残りやすいという話をムートさんとして、かつて盛り上がったという話です。

アイドルをめぐる壮大な仮説

ここから後半の話題としてお話しする「アイドル」の話は、実は私の壮大な仮説になります。皆さんがどう思われているか知りませんが、最初の導入から話すと、私は2011年から日本最大のアイドルAKB48に急にはまりました。先に結論をいいますと、衝撃を受けたのは、こんなに2ちゃんねると結託しているカルチャーがあるのか、と思ったことです。皆さんは、AKBのことは知っていても、2ちゃんねると結託しているという点については意味が分からないと思うのですね。

私は『前田敦子はキリストを超えた』という本を書きましたが、この本への反応は大きく分かれました。AKBが好きな人は「濱野さん、よかったですよ」というのですが、AKBが嫌いな人は「何を書いているんだ、ばか」みたいな感じなのです。内容は関係はないのです。文章って無力だな、と思いました。もっとも、おまえの文章能力がないのだ、と言われてしまうと、それまでなんですけれども。評論とか社会学って、アカデミックには意味があるのでしょうか、ここまで個人の体験によって違が出るのであれば、論じてもしようがないし、書いても全然意味がないと思っちゃいました。だから、この件にむかひいて、アイドルについて語るのをやめて、自分でアイドルをつくることにしたのです。それがPIPというアイドルグループです。きょうは、さすがにここには連れてこなかったんですが。

ですので、ここでアイドルについて論じると自己矛盾が生じるのですけれども、簡単に言うと、こういうことです。AKBは秋元さんがプロデュースしていますよね。一方で2ちゃんねるがあり、AKBについていうと、地下アイドル板という板があります。名称が何で「地下アイドル板」というと、実は結構本質的な話となります。もと

もとは2ちゃんねるでは、「モーニング娘。」等に代表される、ハロー！プロジェクト所属のアイドルの話題を扱う「狼板」がすごく栄えていて、ハロー！プロジェクト系だけでなく、アイドル全般についてあることないしゃべっていたのです。そして、この「狼板」の人たちは、後発のAKB等を、「あんなのテレビとかにろくに出不られる、地下アイドルだ」といってばかりにしていたのです。だから、AKBはこれだけでかなくても、AKB板ではなく、いまだに地下アイドル板なのです。

最初の頃のAKBは、実はテレビにも出ていたのですが、メンバーもたくさんいたので、劇場公演と握手会を積極的に展開していたのです。一方で、もともと70年代とか80年代のアイドルはテレビの歌番組に出て、本当は歌えないんだけど、口パクで音を流すという、ことでつくられてきたわけです。メディアというものは、やらせができますので。そうすると、みんな「かわいい」といってCDを買ってしまう、という現象があったわけです。

そういう、やらせの存在としてのアイドル、虚構の存在というものが、もともとのアイドルの定義だったわけです。けれども、秋元さんたちはそれを変えて、偶像ではなく実像というか、会いに行ける、実際に身体に接触できる、というアイドルを創造したのです。AKB劇場はこの部屋より狭いです。そこに250人の観客を詰めこんで、めちゃくちゃ近い距離で見ると、顔も見えりし、頑張っている姿も見えりし、しかも、2時間たっぷり踊る、



ということを行ったのです。

ぽんこつと2ちゃんねる

さて、私の推しメンの場合でいうと、私は、ぱるる（島崎遥香）という子を2年ぐらい前から推しているのですね。ぱるるという子は、「ぽんこつ」と言われていて、ぽんこつキャラなのです。

基本的に地下アイドル板では、AKBに関した何か大きな事件が起こったら、スレッドをバアッと立てて、みんなワアッと悪口を言うということが行われてきました。ちなみに、地下アイドル板は悪口しか書いてありません。みんなAKBが好きで2ちゃんまとめを見はじめるのですけれど、めっちゃみんなたたくのですよ。何でもかというと、AKBのことをみんな好きなのだけど、AKBには300人とか400人とかメンバーがいて、それぞれ推しメンが、「私はぱるる」とか、「私は何々」とか、もしくはチームごとに「おれはSKEが好き」とか、みんな決まっているのですね。そうすると、逆に何か嫌になるのですよ。つまり、目の上のたんこぶでもいいし、ライバルでもいいし、敵対関係とかにあるメンバーを嫌になるのですね。もしくは、似たようなポジションなんだけど、自分の推しメンとは別のメンバーの方が売れている、これを「推されている」という言い方するのですが、という状況等です。イメージ的には大企業の出世競争に近い状況で、みんながお互いの悪口をワアワアと言いまくっている感じです。

それで、私の推しメンのぱるるという子は、かわいいのですけれども、歌はうまくないし、握手会の対応も全然できないのですね。そして、MCというか、劇場のときのマイクを持ってしゃべるのも全然できないし、基本的に何もできないのです。何もできないから、「ぽんこつ」とみんなで言っていたのです。ファンとしては、「ぱるるのことを好きなのだけど、ぱるるってポンコツだからな」みたいな感じだったのですね。「ぽんこつ」って、故障品ということで、「アイドルとしてはだめかもしれないけれども、かわいいからいいじゃん」みたいなことを、みんな

が2ちゃんねるで言っていたわけです。

そうしたら、2012年の1月くらいのことだったと思うのですが、ぱるるがラジオに出演したときに、ラジオのリスナーから「ぱるるさんは何選抜だったら入れますか」という質問が投稿されて、それに対して、ぱるるが「私はファンの皆さんから『ぼんこつ選抜なら入れる』と言われると思うんですよ」と、ポロツと言ったのです。

要するに、ぱるるが2ちゃんねるのスレッドをチェックしているということです。ちなみに、このように、自分のことをネットでチェックすることを「エゴサーチ」というのです。普段はしょうもないことを2ちゃんねるに書き込んでいる者としては、「ぱるる、ぼんこつか言っている」「ぱるる、見ているぞ、おれらのこと」「よし、きた」といって、ガッと盛り上がったのです。これはファンとしては大勝利と言えると思います。そして、盛り上がると、まとめサイトにまとめられて、さらに盛り上がっていくこととなります。

どうも話に聞くところでは、AKBの会議のたびに「最近、2ちゃんねる、こんなので盛り上がっています。秋元先生」みたいな感じでプリントアウトして見せているらしいのです。それで、秋元さんが「最近、ぼんこつか言われているんだ、おもしろいじゃん」と言ったかどうかは分かりませんが、ぱるるをだんだんと売り出していくことになったのです。そして、グラビアに「ぼんこつエース・ぱるる」みたいな感じで使われたり、しまいには、ぱるるのために秋元さんが「ぼんこつブルース」という曲を書いて、テレビドラマ「マジすか学園3」の主題歌として展開したりしました。

2ちゃんねると秋元康の「結託」

もともとファンがワアワア、ギャーギャーいっていたことを、秋元さんがちょっと違った文脈で使い始めた、ということです。AKBファンからすると、「ぼんこつかおれらが言っていただけなのに、使われちゃいました」「2ちゃんねるで、文句をいっていただければおもしろいことが

起こる」という感じでした。

ここ数年、ソーシャルメディア、特にツイッター、フェイスブックがはやりましたので、広告代理店等が、「ソーシャルリスニング」とか「コ・クリエーション(共創)」ということを使い始めています。これは、ツイッター、フェイスブック上で何がつぶやかれたのかを把握して、いかに顧客の声を拾って即応して製品やサービスの改善に役立てるか、という活動です。だけど、はっきり言って、ほとんどのコ・クリエーションは、AKBに比べると、大したことやっていないのです。AKBこそが、まさにコ・クリエーションであり、コ・プロデュースなのだと思いません。

秋元さんは、もともと深夜ラジオのはがき職人から放送作家、作詞家という流れのキャリアの方なのです。深夜ラジオのはがき職人とは、世の中とか芸能人のネタを、ちょっとうがった目で見て、ずらして書いて笑いを取るという常連投稿者のことですが、このアイロニカルに世の中を見て笑いを取るというメンタリティは、2ちゃんねるにすごく近いのです。そういうのはがき職人が出自で、今や希代の放送作家となった秋元さんと、はがき職人みたいなことをネットでやっている2ちゃんねらーは、似たようなことを展開しているわけです。2ちゃんねらーは、「秋元がこういうことをやってきたから、おれら、この中でいじる」とすると、それを見て秋元さんがそれを使うというような関係です。片や匿名の巨大はがき職人空間2ちゃんねると、片や希代のクリエイターの秋元康が、ある意味で「結託」しているのです。このことは、私もAKBにはまって2ちゃんねるを見いだすまではまったく知らなかったことなのです。「なるほど、こういうことをやっているからAKBは売れるのか」と納得しました。

ところで、AKBはテレビでどうプッシュして売っていくという企画もやっているのですが、基本的にもともの出自が劇場とか握手会にあるので、そこでの評判を重視しているのです。たとえば、2ちゃんねるだったら「握手レポ」というものがあります。AKBのメンバー

が握手会でどういう対応をしてくれた、といったことを2ちゃんねるに書くのですが、それがツイッターで流布されて、それを見てみんなは「最近、みるきー、そんなこと言っているんだ。楽しそうだね。行こうか」とか言って、さらに口コミとして流れて、ワアッとネット上で流布されるのです。こうした動向を運営サイドが見て、「このメンバー、最近、こうやって評価されているな。じゃ、次の曲で選抜にしよう」みたいなサイクルが働いているのです。だから、本当の意味で「コ・クリエーション」であり「ネット競争型」なのですね。

ただし、日本で2ちゃんねるがはやりすぎた結果、匿名だから悪口を言っているだけみたいなイメージができており、ネットワークというものがあまり信用されなくなっています。それは当然、ある意味で間違っているのではないのです。日本のインターネットに書かれていることを、まともに一々聞いていたらだめなのですか。かといって、お行儀のいい正しいまじめな意見ばかり聞いていてもつまらないわけです。お行儀のいい、まじめな意見ばかりでは、創造性が生まれれないと言うか、今まで想像もしてなかったようなことが生まれてくる、というところは起こらないわけです。

さて、普通は「ばるるはぼんこつ」と言われたら、ほとんど悪口のように、または「変なことを言っているな」としか受け取れないと思うのですが、AKBでやっていることは、秋元康ほか運営サイドが、こうしたことをグワッと使うという乱暴さといいますか、ダイナミズムがあるのです。AKBは、ユーザーと秋元康さんがインタラクティブなコミュニケーションをかわして、そこから予想もしないようなアイデアとかプロデュース方針が生まれてきて、それがダイナミズムをいまだに生んでいるのです。これは結構すごいだと思います。

秋元さんは、はがき職人からガアットのし上がってきて、とんねるずとか、おニャン子とか、80年代当時からやっていることと変わらないはずなのだけど、2000年代後半以降にコミュニケーションの観察アイテムである、2ちゃんねるもしくはソーシャルメディアが出てき

た中でAKBが成功したことには、時代的な必然があると私は思います。AKBって、インターネットがなかったら成功してないはずなのですね。そこがすごくおもしろいところだと思います。

私が言いたいのは、匿名掲示板だからこそ逆に自由な悪口が言えるということです。悪口って、もちろんよいことではないのですが、人間が一番創造性を発揮しやすい分野のひとつではないでしょうか。

日本語圏ではどうなのかについては詳しくないのですが、英語圏では、ブラックジョーク的な悪口をうまく言う方が勝ち、みたいな文化がありますよね。同じような意味で、2ちゃんねるも、ただ悪口言っているだけではないのです。おとし指原梨乃さんが男性と交際していたことが発覚して、左遷を食らった時のことです。指原さんは、「さっしー」とか「さしこ」というあだ名があったのですが、2ちゃんねるではたった3日のうちに30個ぐらいのバリエーションの悪口が生まれたのです。基本的には、悪口で個人の実存を破壊してしまうことは言葉の暴力であり、もちろんよくないことなのですが、一方で、悪口は言葉の創造性みたいなものを生み出しているだと思います。そうした2ちゃんねると結託することに成功した初めてのアイドルグループがAKBだと思います。

日本型情報社会論

最後に壮大な仮説の話をしたしたいと思います。

ところで、私も影響を受けているのは、浅田彰さんとか柄谷行人さん、東浩紀さんとかの、ポストモダン社会論です。ざっくりいえば、デカルト、カントとか、要するに主体が自分自身を律するというアイデンティティについて疑問を抱いているんです。

しかし普通の情報社会論はそうではなく、近代社会モデルの延長にあります。個人が自己責任を前提として自由に振る舞う社会、これが近代社会のモデルとなりました。マクルーハン流にいうと、こうした意思決定や情報処理を拡張するのがメディアの役割ということになりま

す。この図式は今のところ本当に揺るぎないというか、基本的にはアメリカ人が新たにつくるサービスというのは、個人の自由を拡張するという観点からつくられているのです。たとえば、匿名性に関して、4ちゃんねるになると違いますけれども、ウィキリークスは普通には発言できないような内容を匿名で流出させて情報漏洩させてしまう仕組みになっているわけです。つまり、基本的には個人の自由を、ひとりひとりが独立しているということを大前提としていると思うのです。けれども、私の考えだと、日本型集団主義の社会はこれとは違うモデルなのだと思えます。たとえば、AKBは、先ほどお話しした通り、運営サイドとおたく、さらにはメンバーが相互にモニタリングし合うわけです。

実際、AKBに代表されるアイドルのツイッターやフェイスブック等、ソーシャルメディアの使い方ってすごいものがあるのです。3年ぐらい前の例なのですが、SKEに中村くんという15歳ぐらいのメンバーがいて、すごい逸材と言われていたのですが、高校受験のために卒業しますとってアイドルをやめちゃったんですね。その後、ツイッターを始めたのですが、そのツイッターのフォロワー数は1万人ぐらいいたのです。1万人ですよ、1万人。私は、その当時、1万人弱しかフォロワーがいなかったのに、「おれより多いんかい」みたいな感じでした。全然世間の人は知らなくても、アイドルをやめても、アイドルおたくは「ツイッター始めた」といったら、フォローしちゃうわけです。

それで、その中村くんがツイッターで何をやってたかということ、「この期末テストの勉強、わかんないから教えてください」といって、写メをバアッと送ったりしていたのです。そうすると、おたくが1万人フォローしているので誰かが速攻で答えるわけです。何でもなし、普通の15歳の女の子に1万人のフォロワーがいて、常にエンパワーメントされているというか、ある意味では共依存の関係にあるわけです。

アニメの「エヴァンゲリオン」で、母親の魂から作られたAIとパイロットとの「シンクロ率」なるものが高まる



と、すごく強くなるという設定があるのですが、まさにアイドルってそうなのです。ファンとメンバーのシンクロ率です。エヴァを知らない方には、たとえば分からなくて申しわけないのですが、

アイドルグループのメンバーが頑張っている、その姿を見てファンも応援したいと思っている。それで、いわゆる応援するという意味の「推す」という活動をするのです。けれども、まじめにやっていないメンバーだとか、ただかわいいだけのメンバーは「おまえ、調子こいている」みたいな感じで応援されないのです。

AKB商法は、まさにファンの力がなくてはなし得ないものなのです。皆さんもご存じかと思いますが、AKBのCDは100万も売れていますけど、実はだいたい10万人しか買ってないのです。平均して1人10枚です。ちなみに、私は同じシングルをマックスで210枚ぐらい買ったことがあるのです。でもこれは割と普通です。私の周りでも年齢とか年収が同じぐらいで、「好きだったら買っています」みたいな人がたぶん1,000人ぐらいはいます。さらに、その下に50枚ぐらい買うという人がいるのです。実際にはCDを買うとか、握手会行く人は10万人しかいないのです。それでもすごい人数だとは思いますが。

一方で、YouTube等で無料でAKBを見ていて「メンバーは知っています」というライトファンは100万人から200万人くらいいると思います。昔はそういう人もCDを買っていたのだけれど、CDが売れなくなっちゃったから、しょうがなく売先が変わったということです。

日本だけが、こうしたわけの分からないガラパゴス商法を始めちゃったので、もちろん100万人には売れていないのですけれど、いまだにCDが一応100万枚も売れ続けているわけです。それによって、オリコン1位ですごい、みたいなことが起こるから、あの子たちのプレステージが上がるわけです。

ちなみに、RHYMESTER宇多丸さんというアイドル評論で有名なラッパーの方がいるのですが、彼がアイドルの定義を「アイドルというのは実力ではなくて、魅力のほうがまさっている存在」と定義しています。これはなかなかうまい定義だと思います。実際、歌はうまくない、ダンスはうまくないわけです。でも、芸能の世界においてはこれでいいわけですね。本来なら実力で評価されなければいけないのだけど、かわいいからいいじゃないということです。今は10代でまだ未成熟な主体なのだし、実力よりも魅力の方がまさっているかもしれないけれども、将来的に女優になるとか、バラエティアイドルになったりして、実力の方で評価されるような人になるように、ということですね。たとえば、誤解を恐れずにいえば、その意味では小保方さんもまさに科学界のアイドルなのです。

一方で、欧米圏ではアイドル的なものは受けないと思うのです。欧米の社会では、女性でも結構マッチョな感じで、一人立ちしています。それこそ「アナと雪の女王」は、王子なんか要らない、私たちありのままに生きるんだという、まさにそういう世界観ですね。

日本でいまだにAKBが受けているのは、ある意味で社会の未熟の結果なのだと思います。おたくとは、まさに大人になることを否定した未熟な存在です。それは普通に考えれば、否定されるべきことだった。しかしアイドルは違うのです。未熟なアイドルとおタク(=匿名的2ちゃんねる)が結託してシンクロ率を高めて社会的影響力を発揮してしまうのです。

「アイドル的・共依存的関係」とは

また、日本社会では、先ほどお話しした通り、メンバー

とファンが情報技術を媒介してつながっているという特別な関係があります。一方で、これからはウェアラブルとかGoogleグラス的なものを通じて、あらゆる人たちが四六時中、ソーシャルメディアにつながっているという社会にどんどんなっていくでしょうね。そして、普通の人はソーシャルメディアでつながっていても、せいぜい150人とかで、いわゆるダンバー数(人間関係の最大数)を超えないのです。でも、アイドルの場合は、15歳でも1万人からバアッとエンパワーされてしまうというか、推されてしまうのです。

私は、ここに日本社会のある新しい主体性の可能性を見たと思うのです。こうした関係性について、私はまだ名前をつけていないのだけれど、「アイドル的主体性」というか、「アイドル的共依存的主体性」というのが良いでしょうか。私はここに日本社会の情報技術かつ社会的な影響力の持たせ方の可能性を見ているのです。

そして、現在のアイドルという存在は、芸能と音楽界に閉じているのですけれども、これを政治、医療、介護、もしくは科学とかに拡張していきたいと考えています。このように言ってもさっぱり分からなかったかもしれないですが。

丸山眞男をはじめとして、基本的には、日本における評論とか、批評とか、哲学とか、学問的な意識を持った人は、正当な近代社会の構成要素として、主体性がなし崩しになっているということはよくないと思われるのです。

だけど、日本をはじめ中国とかアジア圏は、キリスト教文化圏とは異なり、そのような共依存的な主体性の社会であったりするわけです。また、そういう人たちは少数派ですけれども、確実に世界中にいて、みんな日本のおたくとそっくりなのです。

私としては、「何でおまえら、同じなんだよ」というか「なぜ国境を超えてしまうのか」と思います。一般論として、社会が都市化すると、自由意思では恋愛に乗り出せないやつらがふえていくと思います。そうした社会の中である構成要素としての共依存的主体性みたいなものを

私は追求していきたいと思っています。

今、私がつくろうとしているアイドルは、ある研究所の方たちとコラボレーションをしようとしています。たとえばそこでは、布に電極を織り込んで、着ているだけで心拍数がはかれるウェアを開発しています。それを使って、ライブ中にメンバーの心拍計測をして、その心拍データを電波でスマートフォンに飛ばし、ファンが胸に当てるとバイブレーションでメンバーの心拍数が分かるみたいなことにチャレンジしてみたいと考えています。こうすると、東京ドームとか武道館みたいな大きい箱で観ても、豆つぶのようにしか見えないかもしれないけれども、心拍数をダイレクトに感じることで、メンバーが大変緊張しているとか、鼓動が大変高まっていることかがわかるわけです。そうすると、応援している身としては、「あ

あ、すげえ、大変そう。でも、分かる。おれも高まる」みたいな感じになると思うので、こういうことをやりたいのです。

これは単に演出の一例でしかないので、あまり大した話ではないかもしれません。でも、まさに妙につながっている感じがしてしまうという感覚を使って、メンバーとファンの一体感を高め、シンクロ率を高めることで、ただCD売るとかではない方向にもっていきたいと思います。たとえば、政治に応用して、新しい時代の票田獲得にこれを使いたいと思っています。

残り時間がほとんどないので、結論になっていないじゃないかという感じかもしれませんが、一応私が話そうと思っていたことは以上になります。

Part2 : 質疑応答

【太下】 濱野先生、怒濤のごとき1時間超、どうもありがとうございました。

ちなみに、濱野先生から先ほど、間違いの結果としての表現も創造性なのではないか、という問いかけがありました。こうしたエラーやミスによる表現も、現代芸術の分野ではれっきとした表現だということになっています。音楽でいうと、ジョン・ケージ等が行ったチャンスオペレーションですとか、アートの分野でいうと、アクションペインティングのようなことですか、いろいろと事例があります。これらは十分に創造的な行為ということになっています。

というわけで、巖流塾のメンバーも事前に質問を用意してきたんですけども、最初の中谷理事長からお願いいたします。

【中谷理事長】 丸山眞男が「歴史意識の古層」を書いたときは、単純な「アメリカ崇拜型」の進歩的文化人から、より成熟した思想家に転向していました。もちろん、そのときAKBはなかったのですが、ああいう西洋型の個人主義とか一神教の世界ではないような世界をイメージしていたように思います。

きょうの濱野さんのお話は、「つぎつぎになりゆくいきほひ」という丸山眞男が言う日本人の思想のかたちを肯定的にとらえようとしていると感じました。日本の場合、ひとりひとりが確固とした個人を持っている



中谷理事長

たり、また、ひとりひとり自分の城をつくってやっていくという西洋的な世界ではなくて、与えられた状況の中で没个性的に、しかしお互いの感性を刺激し合うような「連歌」的コミュニケーションをやりながら、新しい世界をつぎつぎに創っていくという世界なのですね。きょうの濱野さんのお話は、そういう比較文化論的な意味で極めて興味深かった。問題は、これからそれをどうやって概念化していくかということのような気がします。

人間というものは、本当は相互依存の中で与えられたアーキテクチャの中で、みんなで共振しながら生きている動物なのに、西洋は何を間違ったか、ひとり（個人）で創造するなんていうとんでもないことをやってきた。日本的なネット社会のあり方から、濱野さんみたいな仮説を立てられるというのはすごくおもしろいことで、これをどうやってうまく表現し、命名し、みんなを説得するかというのは、これから2、3年の仕事として大いに期待したいと思います。

【濱野講師】 ありがとうございます。

ポストモダン系の議論で「リズム」だの、「怨恨性」だの、名称と概念の輸入だけは早かったけれども、輸入しても日本社会に定着せず、グズグズみたいな感じであったのが40年ぐらい前の時代の話だと思います。また、「行動する評論家」みたいな立場って、ずうっとありましたけれども、私はそういう乗りでいちいち論じることあまり意味ないかなと思っています。



私も概念に名前をつけることが大事だと思うのですが、今はとりあえずは実例をつくることを重視しようかと考えています。私は、哲学思想とか評論の言葉にあまり期待をしていなくて、実現してから名づける方が良いのではないかと思います。そうすると、本当になるので。まずはパフォーマンスでやってみようということです。

【太下】 では1番手の質問は萩原くん、お願いします。

【萩原】 ふだんは農産品とかキャラクタービジネス等の調査研究や事業化支援を行っております。

質問ですが、『アーキテクチャの生態系』では、インターネットのアーキテクチャから日本社会が見えてくるという話がある一方で、アイドルのアーキテクチャを分析することで日本社会が見えてくるのではないかと思います。特にアイドルという存在はインターネットの活用だったり、コミュニケーションのあり方等、先を行っている存在であると感じています。このため、アイドルの未来が分かれば、われわれが研究しているような将来の日本が分かるのではないかと考えています。今後のアイドルの行方をどのようにとらえていращやるのでしょうか。

【濱野講師】 ありがとうございます。

きょうここにお伺いする前に、フジテレビでAKB総選挙の前日の深夜にAKB評論家と言われているような人たちを集めて討論するという番組の収録があったのですが、そこでアイドル評論家の中森明夫さんという方が、まさに同じことを言っていました。アイドルというのは時代を先取りするとか、エッジがきき過ぎているので、そこで起きていることが、その後の日本社会を反映するのだ、みたいなことです。

実際、AKBより売れていない、これから頑張らなければいけないアイドルたちにおいて、四六時中、インターネットでファンや自分を支援してくれる人とつながり、交流し続けるという現象が生じています。たとえば、3万枚ぐらいCDが売れている「アリス十番」というメタルアイドルユニットがいますけれども、誰



萩原氏

かがツイッターで「アリス十番」とつぶやくと、メンバーから勝手にフォローされるのです。普通はファンがアイドルをフォローするわけではないですか。基本的にアイドルはファンと直接につながってはいけなから、普通はフォローをしないのですけれども。そういう状況で、アリス十番のかわいいメンバーに勝手にフォローされると、「エッ、フォローされている」みたいな感じで、好きなやつらが勘違いするわけです。アリス十番は1万人とか2万人がフォローしているのです。この1万人とか2万人のフォロワーを媒介として、「とにかく、アリス十番を知らなくても何でもいから、興味を持ってください」という、積極的な営業を仕掛けているのです。そして、四六時中、ツイッターでファンとつながっていて、いかに常にファンとコミュニケーションし続けるかという限界に突入していこうとしています。

また、「私信」という手法もありますので、私が実際にもらったことのある「私信」のことをお話しします。苦笑していただいてまったく構わない例なのですが、

実は、私はメロンちゃんという子との握手会のときにiPhoneケースをあげたのです。メロンちゃんは、それについて「ありがとね」と言いたいわけですね。それで、メロンちゃんが自分の写真をアップして、「私、変わったところが2カ所あります。みんなわかるかな」といったのです。僕は瞬時に分かるんです。なぜかと



濱野講師

いうと、僕があげたiPhoneケースをメロンちゃんが持っているからです。つまり、こういうかたちでさりげなく、「iPhoneケースをくれてありがとね」と伝えてくれたわけですね。でも、私をはじめ特定のファンに向けて「濱野さん、メロンのケースをくれてありがと」なんて書いた日には、他のファンから「てめえ、何、勝手に出し抜いているんだ」みたいに怒られてしまうわけです。アイドルはファンに対してあくまで公共的で平等の存在でなければいけないのです。でも、感謝の言葉は言いたいと言う時に、アイドルはどうかという、ちょっとメッセージを変換してメタメッセージを入れるということをやっているのです。

その他、AKBでも、「あの、今着ているTシャツはあれがプレゼントしたやつじゃん」「やっときた」「いいね。ヨッシャ」みたいな感じの、そういうしょうもない自慢合戦が起こるのですが、あげた身としてはとてもうれしいわけですね。だから、私もその時の画像を保存しておいて、どや、と本日プレゼンしているわけです。端から見れば何の意味もないことなのですけども、まさに応援しているファンの立場としては、とても重要なことなのです。

ちなみに、『前田敦子はキリストを超えた』でも書いたのですが、アイドルのライブ中に、アイドルと目が合うことがあるのです。こういう会場で目が合っても別に普通というか、いくらでも視線をかえるのは自由なのですけど、アイドル劇場って、もっと狭い

空間なのです。また、アイドルがファンを指さす「振り」があるのです。たとえば「会いたかった」と、ぐっとやるという振りがあるのです。そのときに、誰に指を差すかということは実に重要な問題なのです。ファンの側は、「フリコピ」と言って、アイドルの振りをまねたりするのです。これが合うと、「おれに来た」みたいな感じで、すごい興奮するのです。本来ならみんなに向けて踊っているものなのに、ある瞬間だけ私的にというか、ワンツーワンにコミュニケーションするみたいな感じになるのです。これを「レス」と言います。こうしたコミュニケーションモデルには、すごくおもしろいものがあります。私はその魅力について、「このすさまじさって何なのだろう」ということを、社会学とかメディア論の視点からずうっと考え続けているのです。

最初の質問に答えているかどうか分からないのですが、たとえば地域振興に関しても、B級グルメおいしいですとか、キャラクターがおもしろいですとか、普通に価値を発信してもしようがなく、「私に直接来た」みたいな「レス」や「私信」をどう送るのがすごく大事だと思っています。これは、地域振興だけではなく、ありとあらゆる領域で当てはまりますね。政治家でもいいし、アナウンサーでもいいし、学者でもいいし、皆さんのようなリサーチャーでもいいし、「自分に来た」と思わせることが大事です。だって、その効果が全然違いますよ。

たとえば、しっかり実名で手紙を書くとか、そういうことをやれば相手に届くのですけれども、それでは年に数十件とかなっちゃうので、明らかに効率が悪いわけですね。

私の考えるアイドルは、ある意味勘違いでいいのですけれど、まさに「自分に来た」と思わせるコミュニケーション・モデルを大量生産しようと考えています。そして、このモデルをどうほかの領域に拡張するのか、ということを考えていくつもりです。

【太下】 どうもありがとうございました。では次に船越さ



船越氏

ん、お願いします。

【船越】 濱野さんのお話の中で一番興味があったのが、アイドルの仕組みを政治に適用することができるというお考えです。たとえば永田町の政治がAKBのようなオープンでフィードバックを重視するような仕組みで将来は変わるとお考えですか。

【濱野講師】 永田町はすぐには変わらないでしょうね。

私は、AKBは自民党のどぶ板政治の正当な後継者だと思っているのです。

たとえば、AKBで今年16位に入る須田亜香里さんというSKEのメンバーがいて、はっきり言って全然かわいくなくて、公演でもいいポジションにいなかったのです。でも、彼女は握手をすごい頑張る人で、いつもファンレターをくれるお客さんとか、握手会によく来るお客さんのことを全部ノートにメモっているのです。たとえば、「この間、こんな話した」「こんな手紙をもらった」「この人はこれが好きみたい」という情報を全部メモっていて、握手会の前にそれを読み直してから行くのです。だから、2回、3回行っただけで、「何々さん、また来てくれたの」と言ってくれるのです。ちなみに、これをファンの間では「認知」というのですが、すごいことなのです。普通は、ハイテンションで握手するということを7、8回繰り返すと、ようやく顔を覚えてくれたりするのですけれども、3回目では普通はあり得ないのです。だから、有権者というかファンのことをめちゃくちゃ気遣って覚えているわけ

す。

もともと田中角栄とか田舎の政治家は、たとえば有権者のおばあちゃんの孫の就職なんかについてメモっておいて、便宜を図るわけです。そうすると、おばあちゃんが「あの人はいい人だ」「自民党の田中さんはえらい」と自分たちの子どもや孫に言って、その結果、たくさんの票が集まるわけです。

こういう方法をやっているかぎり、政策もくそも関係ないわけですね。だから、「あの人はいい人や」と言われるために、どぶ板で接触して、握手しまくるわけです。これはAKBと何が違いますか。やっていることは同じやん、という感じですよ。ただ、やっている分野が、政治じゃなくて芸能にかわっただけです。僕はそれをもう一回、政治に差し戻したいと思っています。

さらに、どぶ板の場合はおばあちゃんからアプローチしましたが、今回のポイントは違うのです。ちなみに僕がつくるアイドルは、20代はアイドルをやっているのですが、30代になったらさすがに歌って踊ってはつらくなるので、介護士にしようと思っています。介護士になるメンバーはアイドルのときに培ったおもてなしの技術を生かして、料金はちょっと高いけど、おじいちゃんやおばあちゃんにやさしい介護サービスをするというイメージです。

また、地方議会の政治家になるアイドルも育てていこうと考えています。そして、5年後とか10年を目処



に、おたくを対象として「東京都何々区に移住してくれたら何々特典あげます」みたいなかたちで、有権者をふやすキャンペーンをやりようと思っています。

以前、2ちゃんねるで西村博之さんがポロツと言っていたことがあるのですが、秋葉原がある東京都千代田区は人口数万人しかいないのですね。ですから、おたくが一気に住民票を移して、5万人ぐらいになったら議会の半数ぐらいは乗っ取ることができるのです。これと同じことを、アイドルの力を通じてやりようと思ったのです。地方議会に「おたく自治区」をつくって、それを通じて中央政界まで進出も考えています。私は一応りべらるなので、このアイドルの仕組みに、政治理念とか目標とかの要素をどう入れるのか、ということを考えています。

【太下】 では宮本君、どうぞ。

【宮本】 「共依存」という現象は日本の風土に合っていると思うのですが、それを利用した場合、政策ではなくて、完全に人ベースで政治が行われてしまうことになると思います。そのシステムを補完するための考えについてお聞かせください。

【濱野講師】 まさにおっしゃる通りで、どうしていくかが問題です。さっきのご質問の最後に答えた、どうやって、そういう理念とくっつけるのか、と言ったところにかかわる部分です。今の方法のままでいくと、破壊主義的な政党になる懸念もありますので、ではいったいどう制御するのだということですね。

普通の政党というものには政治家がいて、その政治家が有権者から信任されるかどうかという仕組みですね。そして、政治家が議会で投票して政策を決めるわけですが、その投票する政治家を投票で決める、という入れ子構造になっており、それで全体を制御するみたいな感じです。

海外だと、津田大介さんが興味を持っているインターネット政党があります。これは、政党なのですが、市民のネット経由の投票で政策を決定しており、政党はただの入れ物でしかないのです。私もこれに近



宮本氏

いことを考えていました。実は私がかつてウェブ学会で「初音ミク、出馬せよ」と言ったときに、全く同じことを言っていて、考えることは同じなのだなと思ったのです。これに近いモデルをやることになるのだろうな、という気がしています。つまり、間接民主主義を間接化するみたいな話です。ただし、それもコスパが悪い感じがしており、どうすればいいのか、考えはまだ練れてないのです。

AKBの場合、総選挙はあまりにもよくできた仕組みなのです。総選挙の結果が決まると、「この順位だな」みたいなすごい納得感があり、とんでもなく民主的な決定が行われた感があるのです。このメカニズムは、ある意味で魔術的なもので、投票や政治の根源でもあると感じています。そもそも投票することのおもしろさが、人間にはあるのだなということが、AKBにはまって初めて分かりました。

たとえば、ボランティアに参加したことがある人は、「政治っておもしろい」と思うはずなのですが、ほとんどの人にとって政治なんかまったくおもしろくないのですよね。「朝早くから選挙カーなんか走らせるんじゃないわね」という程度のものでしかないのですね。私も33歳になるまで完全にそう思っていました。自慢じゃないですけど、小選挙区制になったし、そもそも無駄だと思っているからほとんど投票に行かなかったことがないのです。超無責任ウルトラ社会学者でしたから。

でも、AKBの選挙システムは死に票がないのです

ね。今ちょうど投票期間ですけども、80位まで発表されて票数も出るのです。普通、小選挙区制だと1位しか当選しないですから、1位にならなかつたら意味がないわけですし、票は死ぬのです。ですから、1位になる見込みがない候補を応援する場合、そもそも自分が投票する意味がないこととなります。でも、AKB総選挙は、たとえ60位であっても、「このグループのこの立ち位置で60位だったら、次から結構ファンも入れてくれるだろうし、次の選抜に入れてあげようかな」とか、運営側も考えるわけです。つまり、死に票ではなくて、人気の指標になるのですね。

このように、AKB総選挙の「死に票ではなく、指標になる」という要素について、現実の政治にどううまく使えるかについて、考えていきたいと思っています。

【太下】 ありがとうございます。すでに時間はオーバーしているのですけれども、どなたかどうしても聞きたいということがあればどうぞ。

【張】 濱野さんが、アイドルのプロデュースを始めた最大のきっかけは何なのでしょう。お話にあったように、何かを検証することが目的なのか、単にアイドルが好きだからやりたいのか、そうではなくて、お金のためであるとか。

【濱野講師】 すごくいい質問ですね。その通りですね。実は何でやろうと思っているのか自分ではよくわからないのです。権力欲なのか、金なのか、性欲なのか。



張氏

まずひとつは、アイドルが好き過ぎたからですね。AKBはすごいだけけれど、規模がでかくなり過ぎて、だんだんとだめになっているのです。秋元さんの目が行き届いていないみたいですし、おれがマネージャーなら絶対こんなことしない、みたいなことのオンパレードなのです。

ちなみに、このことは雑誌等で書いているのですが、私がつくるアイドルは、「アイドルがつくるアイドル」というコンセプトにしようと思っています。簡単に言うと、私のつくるアイドルには、マネージャー層等の運営がない予定なのです。アイドルって、どうしても黒服着たおっさんが女の子を働かせて搾取しているみたいなイメージがありますよね。実際にはそんなやつはあまりいないのですけれども。

いずれにしても、アイドルがファンから得た金については、普通は運営が中抜きというか中間搾取するわけです。中間搾取というと大げさですけども。もちろん私も、全部はあげないで、うちの投資分は回収します。けれども、ざっくりいうと、20代の女の子が月収でマックス30万ぐらいもらえるぐらいの仕組みを目指しています。そして、アイドル運営になると実際にもらえるのですよ。

おっさんがちんたら運営しているアイドルを全部つぶすために、アイドル運営をしようと考えています。結局、マネジメントなんて大したことじゃないのです。アイドルグループの運営で私が何をやっているのかというと、全員Gメール作成とか、GRつくってiPhoneに入れるとか、グーグルカレンダーでスケジュールを管理するとかです。

マネジメントの基本って、スケジュール調整なのです。特にAKBだとメンバーが何十人といるので、スケジュール調整がすごい大変らしいですよ。たとえば、AKBは週末には握手会等で、岩手なり北海道なり九州なり全国に行くのです。そして、実際に行くメンバーは、だいたい3日前とか2日ぐらい前という直前になって決まるのです。AKBの公式のブログに、「今

「回行くメンバーは、〇〇です。皆さん来てください」みたいな感じで告示されるのです。それを見て、おたくのファンは、「今週末、東京に来るのか、じゃ行こうかな」みたいな感じになるのです。ちなみに、メンバーもそのブログを見て、「私、行くんだ」と知るらしいです。これは私が必ずしゃべる逸話なのですけれども、どういふことか、分かりますか。ファンとメンバーが同じタイミングでスケジュールを把握しているというこのめちゃくちゃさです。たぶん、事前にマネージャーが関係各所に電話とかしまくったりして、各事務所の仕事がかぶっていないかとかチェックして、それで決めているのだと思います。けれども、そんな杜撰さ、あり得なくねえみたいな感じですよ。僕は電話を使わずにいかにマネージメントするかを考えていて、グーグルカレンダーでバアッと予定を入れることを想定しています。グーグルカレンダーが秘書2人分ぐらいの仕事をなくすことになると思います。秘書2人が要らないのだったら、マネージャーも要らないじゃないか、ということです。そして、その分の金を全部アイドルにあげるということです。

結局のところ、何でそれをやりたいのかと言われると、僕も分からないのです。とにかくアイドルのことを好き過ぎて、アイドルのカルチャーとか文化をもっと世の中に広めたいという感じです。アイドルの文化が芸能の世界以外に拡張した方が、日本社会は絶対よくなるはずという確信があります。また、アイドルが芸能界に搾取されて終わり、ということにたくないという2つですかね。これは、ほかの芸能事務所には絶対できないというか、一言で言うと従来型の芸能事務所の否定なのです。でも絶対に勝つ自信はあります。

さらにもうひとつの理由として、アイドル文化に対する危機感がありますね。AKBも限界がきていて、このままだと終わると思います。その限界とは、ほとんどマネジメントと組織力の問題なのです。要はでかくなり過ぎたのですよ。最初のころはファンも少ないから共依存の関係がうまくつくれて、しかも成長してい



太下氏

くということが実現できたのです。共依存かつ売れてきて、ファンがふえていくから、日本でほぼ唯一の右肩上がりの夢が見られる世界だったのです。だけど、それがプラトニーに到達して、ちょっとがたがき始めているなというのが僕から見ての認識です。ですから、もっと軽量コンパクトでアメーバ経営みたいな感じの別のモデルにしたらうまくいくのではないかと、というのが僕の発想です。思いついたからやるみたいな、そんな感じです。

【太下】 みなさん、質問はよろしいでしょうか。今日は、社会学の研究者からエバンゲリストに変身した濱野さんの怒濤の講義でした。これできょうの巖流塾は終わりにします。濱野さん、どうもありがとうございました。